



〈研究〉心的相互作用と社會の本質(2)

小松, 堅太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 33(5):758-770

(Issue Date)

1922-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053494>



心的相互作用と社會の本質 (其二)

小 松 堅 太 郎

三

心的相互作用を以て社會の本質となす學者は以上のやうに多數に上るのであるが、この事實は必ずしも同説の眞偽を判斷する標準とはならない。私はこれより該説を論評し、その醇化より得らるべき結論に達することゝするであらう。

心的相互作用説の第一の難點は反對を以て社會となさねばならぬ點に存する。併し乍ら結合と分離とは兩極に對立すべき觀念である以上社會結合の本質中に反對の場合を含まねばならぬのはこれ苦しき矛盾である(註九)。然るに多くの學者は反對が反面に於て結合を保つこと他の愛著等の及ぶざる力あることを特に力説し、反對の正面たる分離の點を故らに看過せるかの觀があるのは、耳を蔽ふて鈴を盗むの類と一般であるとの非難を免れぬであらう。(註一〇)

(註九) 反對を以て社會であるとする學者にジムメルがある。ジムメルは曰ふ、人と人との相互作用が社會結合であるならば最も激烈なる相互作用の一場合たる戦争は社會結合とし考へられねばならない。何となれば戦争は個人の孤立的存在に於ては不可能であるからであると(Simmel, a.a.O. S. 247)。思ふに、心的相互作用説の支持者は總べて斯うする徹底的結論に到達せざ

るを得ない。到達せずとするならばこれ理論の自然的發展を阻むものと謂はねばならない。

斯く戦争が社會結合なりと斷言するも、本來結合と分離とは兩極端をなす別種の概念なる以上、而して分離は反對を包含する以上反對の一場合たる戦争が結合そのものなりといふは矛盾にあらずして何ぞや。之れでシュメルが只管相互作用説に執著したる結果遂に斯くは論斷したものであらうと考へる。

(註一〇) シュメルの語を以て云へば、嫌惡嫉妬貧窮貪婪等によつて争鬭の勃發した場合に其の争鬭は本來分離的對立 *der auseinanderföhrendes Dualismus* に對する救助運動 *Abhilfswegung* であると同時に、又假令一方の倒潰に因るとしても兎に角何等かの統一を得べき方法である。これ恰かも障害から免れるためにする有機體の努力が、病氣といふ激しい現象と同時に起るやうなものであるといふことになる (Simmel, a. a. O. S. 247)。併しこれ争鬭の空間的接觸を誘致する方面のみを見て争鬭當事者相方の心的分離を看過せるものである。愛著なくして何の結合ぞ。若しそれ争鬭當事者の各々其の一方の内部的結合が争鬭によつて強めらるゝといふ理由を以て、争鬭が社會的分離の救助運動であるといふならばこれ耳を蔽ふて鈴を盗むの類である。

スタッケンベルグ又敢然陣頭に立つて叫んで曰く、心と心、社會と社會との分離的勢力 *divisive influence* は結合的勢力 *unitive influence* よりも社會的に *socially* 有效である (Stuckenberg, *ibid.* p. 85) と。蓋し嘗ては何等相互に愛著するところもなき兩國民が共同の敵たる第三者を有する時は容易に結合するであらうから (Cittio, *ibid.* p. 86)。又スモールの説くやうに一人の婦女を奪ふ二人の男子の間には争鬭が起る。而して一方勝てば從來無關係であつた二人の中の一人は主人となり他は奴隸となるのである (Small, *ibid.* pp. 10, 11)。然し乍ら私は斯かる老獪なる論法に魅惑せられてはならぬ。反對が裏面結合を促がす力のあることは予輩と雖も肯定するに吝さざるものではない。問題は反對が社會なりや否やの一點に存する。戦争亦社會なりといふシュメルの蠻勇なくんばこれ自説に忠なる所以ではない。斯く宣言すること本意ならすとすれば須らく去つて他に論據を覓むべし。デヴィスの如く一方に於て適應的反動 *adaptive reaction* 又は適應と云ひ、心的相互作用としての反對の場合を充分包含し得る概念を提示し、他方に於て協働の概念に隱遁せんとするが如きは卑怯の沙汰であると謂はねばなら

α (Davis, op. cit. pp. 9, 78, 193)。

ロツツェは斷え間のない戰爭は民族をして相互作用を行はしめるといつて居る (Loize, op. cit. p. 285)。蓋し相互作用が反對を包含する證據となることも出来る。

心的相互作用説の享くべき第二の非難は社會を個人の相互的活動 activity にありと解し、從つて社會は靜的狀態に非ずして過程 process にありとする點にある。

社會を以て過程にありと解する學者は恐らくは機能に著眼したものであらうか。蓋し社會に機能あり従つて活動あり、斷えず進轉して止まざる社會は即ち過程に存すと考へ得るからである。一點を譲つて國家の如き會社の如きに付いては或ひは然りと云ひ得るとしよう。然し乍ら友人關係は如何、知己關係は如何、恩人と我との關係は如何、而して更に母親と嬰兒との關係は如何。友人關係を以て一定の機能を行はんがための結合と解すること人を誣ふるも甚だしきものであらう。相愛するところ其處に社會あり、師の恩愛に咽び子弟又愛せらるゝ處従つて社會あり、故に斯かる社會は活動と解するを要せず過程と解するを要しない。加之國家の如き機能社會と呼べるゝものも事實上(法律上又は行政上のことは敢て問はず)其の機能の行使を止むる場合もあるであらう。尙ほ議會の如き一定期間に限らるゝ會期を有するものは、議會としての活動は其の會期中に限らるゝのである。而も活動の存せざるどころ議會なしと誰が云はうぞ。スタッケンベルグが自ら引例して自ら苦しき辯明の溪谷に墜落したのは見るも無殘の最後であると謂はねばならぬ(註一一)。

(註一一) 心的相互作用の一時的中止は社會の存續を中斷するものでないとスタッケンベルグが主張する論據には二つある。

一は議會の如く會期中許りでなく休會の場合と雖も常に存續すると認めらるゝ社會に於ては、機能の存續が社會の存續を決定

する。議會が相互作用としての討議を中止した場合でも、必要に應じて何日何時でも集會討議し得る機能を有する限りそは存續すると云ふのである (Stuckenberg, op. cit. pp. 86-89)。二は心的相互作用が個人間に直接に行はるゝことを要しない。國家の如き廣大なる社會に於ては同一の法律又は中心勢力 the same influences に對して國民が服従することによつて社會の存續は保たれると云ふのである (ditto, op. cit. pp. 86-87)。第一の論據に於ては全然相互作用が社會の本質たることを否定して居る。何となれば何日にも必要に應じて集會討議をなし得る機能を有すること、極言すれば其の設備が社會の本質であるとするならば、機能の遂行に於て行はるゝ心的相互作用は其の本質を爲さざるものと謂はざるを得ないからである。第二の論據に於ては心的相互作用は單なる假設である。斯かる廣大なる社會に於ては個人間の直接なる心的相互作用は不可能なるが故に茲に法律又は權力を拉し來つて之れを結合の紐帶と呼び、其の優者たる者の命令に對する人民の服従を以て心的相互作用とするに至つたのである。然し乍らこの場合に於て國家の成員全部に對して絶えず又成員全部より間斷なく心的交通の行はるゝとするのは假設に非ざれば不可能である。此の點に關するジムメルの所論は徹底して居る。即ち包括的統制的組織の間に於ても無數の微細なる個人の相互作用が行はるゝことによつて社會は成立する (Simmel, a. a. O. S. 18) と云ふのである。ジムメルは先に戰爭は社會なりと云ひ今又かゝる所論をなす、其の徹底したる態度は自說に忠實なる所以であつて、他の學者が徒らに小細工を弄して缺陷を彌縫し得たりとするに比すれば、其の學者的良心の旺盛なる眞に敬服の外はない。

社會を過程なりと解する學者は其の他にロットエ (Lotze, op. cit. p. 541) スモール (Small, op. cit. pp. 405, 197) ヘルツ (Hertz, op. cit. pp. 14-15) デヴィス (Davis, op. cit. 193, 19) 等がある。ジムメルが社會を過程と考へたが、かうかは必ずしも明瞭でない。唯氏が直接なる個人的資料を以て社會を構成する根元的(原始的)過程が形式的觀察の下に落ち來ることを説いて居るのであるが、斯かる過程即ち科學的に觀察せらるゝことの稀なる集團に於て行はるゝ特種なる相互作用 die besonderen Wechselwirkungen は社會を構成しつゝある形式として、又は社會結合の部分 Teil der Vergesellschaftung として證明せられると謂つて居る點 (Simmel, a. a. O. S. 20-21) を考ふる時は、相互作用の一部のみに過程を認めたものと解するを妥當とするであらう。斯くの如く過程なる考は社會學的に支持す可らざるものであるが、故にこそジムメルは社會を統一體なり

と云ひ、賢明なる左右田博士が社會は相互作用そのものではなく、寧ろ斯かる相互作用より抽象せられたもの *Abstrahiertes* 客觀化せられたもの *Objektiviertes* であると云ひ、又個人と關係を保ちつゝ而も個人より離れたる統一體である (*Soda, aa. O. a. 65*) といはるゝのは事態の洞察に一爛眼を有するものであるとば謂へ、反對も亦社會なりとの提言は見事に其の統一體を破壊し去らんとしつゝあるのである。

四

述べ來つたやうに社會本質に關する相互作用説は有力なる學者なほ之を支持するに至らず、斯く重大なる難點を包藏するので、少くとも社會の本質の研究に従事する者にとつては直ちに採つて以て自説とすることは出来ない。私の曾て一言せるが如く、斯説の醇化せられたるところに眞に探るべき或物が潜んで居るのではあるまいか。碩學ロツツエ、ジメル等によつて暗示せられた相互的 *wechselseitig, reciprocal* なる思想の中に、予輩の學ぶべき或ものがあると云ひ得ぬであらうか。勿論既に反覆敍説したやうに相互的といふ思想の中には仍ほ未だ醇化せられざる部分を含むことに氣付かねばならない。反對はなほ社會なりとするジメルの苦しき辯解は吾人の記憶に新たなるものがある。然らばかの學ぶべき或物とは果して何か。親は子を愛し子は親に親しみ、戀人相睦み友人又相交驩する。國民同胞を想ふの情は更に高潮して人類に對する抑へ難き愛著となつて現はれる。結合の在る所常に和氣霽々として人々は喜々談笑する。分離のある所人々は會つて一語なく、或ひは怒り、或ひは恨み、或ひは嫉む。從つて讒謗起り罵詈起り爭鬭起り遂に血の雨となる。前者の麗

はしき情緒の溢るゝに反し、如何に後者の血まなぐさきことであらうぞ。而も是等の兩者は凡べて個人の心的作用の相互性によつて生ずるのである。等しく相互的といふも前者は親しき或物を含み後者は恐ろしき或物を含んで居る。従つて社會結合を以て嚮導觀念とする社會學は相互作用中より分離を包含する部分を放擲せねばならない。然らば果して何物が残るか。

何人も感知せざるべからざるが如く、残れるものは愛著的相互作用である。然し乍ら私は又茲に一の制限を設けねばならぬ事情に逢著する。抑も心的相互作用は前既に説明したやうに相互的活動従つて過程と解せらるべき難點を有する。従つて活動止み相互作用の止む迄には社會の存續又中斷するものと謂はねばならない。而も社會は斯かる相互作用の中止せられたる場合とても其の存續を中斷するものでない。友人遠く離れて異境に放浪し、音信絶ゆること幾星霜に及ぶとも友を憶ふの至情胸懷に溢るゝものがあり、さまでにあらすとするも、何れかの日に邂逅する機會に手に手を取つて相互の健在に滿杯を傾け盡すの情緒の存する時、誰かこの兩人を呼んで友人に非ざるものとなさんやである。

かやうに見來る時は愛著的相互作用といふは仍ほ未だ不完全なるを免れない。故に私は更にこれに精練を加へて相互作用より作用の部分を除くせねばならない。而して之れに補ふに個人の共存といふ概念を以てせねばならない。蓋し個人が共存するのでなければ社會は成立するに由ないからである(註一二)。斯くして得らるべき社會結合の概念は個人の相互愛著的共存と云ふことになる。これが最後に得たる社會の本質である。

(註一二) 共存といふことの暗示は高田教授の共存説より得たものである。高田教授は『望まれたる共存』を以て社會の本質とせらるゝものである。(高田教授 前掲 六四頁以下)

茲に於て乎私は自説に對する非難を豫め防止せねばならない。征服國家に於ける征服者と被征服者との關係を稱して相互愛著的共存と云ひ得るや如何との質問に付いて考へて置かねばならぬ。蓋し征服者と云ひ被征服者と云ふ、素とこれ相互に敵對關係に立つたものである以上假令一方が他方に征服せられて服従しつゝある場合と雖も、少くとも被征服者側に於て征服者に對し愛著を感ずべき謂はれがないからである。而してこれなほ一の社會であるとするならば、私の所謂社會本質に關する論議は其の支柱を失つて崩解するものと謂はねばならない。若し然りとすれば私はこれに對して果して如何なる防ぎをなすべきであるか。

茲に一國家内の勢力が二派に分れ、曾て甲の勢力は一國の中心をなし乙の勢力はそれより分化したものと假定する時、而して甲の官民は自己の利益より乙の官民と強く共存を欲求して居るけれども乙の官民は甲の勢力より分離せんとして居る時、もし征服者の一方的共存の欲求が仍は被征服者との間に一社會をなすものとするならば、そも亦一の社會結合であるを謂はねばならぬ。何となれば一方に於て甲は飽近乙との分離を避けんとし強く之れと共存せんことを欲求し、又他方に於て甲は乙との共存の維持を必らずしも不可能なりと思惟せず、仍は現に乙は甲の勢力を全然拒反して居るでもないからである。而も乙は甲に對して傳統的に反感を有し、常に之れとの共存より脱却せんとしつゝあるのである。國法學的立脚地より見る時未だ甲の乙に對する政治的支配が法律上(憲

法又は其他の公法上）停止したのでないから、之れを一國として觀察し得ること必らずしも無理からぬことであらうし、又國際法上之れを交戰團體又は獨立國と見做す必要も起らぬであらう。然し乍らそは單に法律學上の問題であつて、之れと其の見地を異にする社會學は必らずしもこれに従ふの必要がなく、獨立に是等の狀況を觀察することが出来るのである。社會學が其の有する嚮導觀念より是等の國家的狀況を眺むる時、法律學上の國家の概念と其の範圍を異にする概念を認め得るのと恒に必らず不當であるといふことはない。故に私はこれを直ちに一の社會結合と見ないで、二勢力間の反感の程度と共存の欲求の強弱とを斟酌して。結合又は分離を決定せんとするのである。反對する學者は云ふであらう。この場合未だ反感が一方的であるから社會的分離ありと云ふことは早計である。分離あるがためには反感が相互的でなければならぬ。然るに此の場合乙こそは甲に對して反感を有すれ甲は何等乙に對して反感を有することはないから、社會的分離は此の場合認むることは出来ないといふことである（註一三）。併し乍ら乙が甲を嫌忌しこれを排せんとするの情強き時、甲は果して平靜の心的狀態に止まることが出来るだらうか。少くとも多少のこれに應酬する情緒の起り得ることは寧ろ當然の人情ではなからうか。若し然りとするならば甲も亦乙に對して之れと同程度若くは稍々弱き程度の反感を有するものと解することも出来ねばならない。然れども此の點は姑く置いて論ぜず。

（註一三） 高田教授は反感が相互的でなければ社會的分離ではないと説いて居られる。社會的分離とは人が相互に他人に於て消極的價值又は非價值を認め居る狀態なりと一概に云ふことを得べし。或ひは又更に立入りに價値の根原が *interest* にある

ことよりして分離とは人が相互に他人によりて自己の interest に害はるゝ状態なりとも云ひ得べしと謂つて居られるのである而して更に、吾人は常に他人の容貌並びに風采の美醜を見、其の醜甚だしき時は一種嫌惡の念を催すと述べられて直ちに、此の種の反感をさきに吾人の叙述せざりしはそが相互的性質を缺き従ひて社會學上に於ては重要ならずと信じたるによると云つて居られるのである（同氏著 社會學的研究 一六四頁、一六六頁、一九〇頁）。併し乍ら一方的とは云へ少くとも反感の存する場合に社會的分離の或要素が生じたものと解するを妥當とするのではなからうか。換言すれば私は一方的反感は社會的分離を伴ひ來ることの普通なる點より準社會的分離であると解したのである。

然らば甲乙二者のうち乙のみが甲に對して反感を有し甲は乙に對して愛著こそ有せざれ未だ反感を持たず、自己の利益上これとの共存を欲求せる場合に於ては社會結合と解すべきか分離と解すべきか。高田教授自ら名づけらるゝところの其の共存説によれば社會結合と解すべきことは明かである。何となれば反感が相互的でなく又共存の欲求が一方的ではあるがなほ存するからである。然し乍ら前述の如く一方的反感を以て準社會的分離と解するものにとつては社會結合と解することは出來ない。とは云へ一方的にも少くとも共存の欲求の存する場合にはこれを以て直ちに社會的分離となすことも妥當とは思惟されない。故に私は斯かる場合はもし反感の反對的實現性が共存の欲求より強き時は準社會的分離の存するものと解し、然らずして共存の欲求の實現性が反感より強き時は準社會結合の存するものと解するのである。準社會結合と云ひ社會結合と云はないのはそれは相互愛著的共存そのものではなく、それに達するの階梯をなすものと考へるからである。蓋し共存の欲求が満足せしめらるゝ時は一種の快感を伴ふであらうし、そが反覆せらるゝにつれて愛著的情を生ずるに至るからである。而して反感が相互的なる場合に於ては假令一方的に共存が欲求せらるる場合

でも仍は社會的分離の存するものと解すべきであると私は考へる。蓋し相互反感の社會的反對に轉化する可能性を有することが一方的共存の欲求が相互愛著となり得る可能性よりも遙かに容易であるからである。要するに私は相互愛著的共存を以て社會結合と解し、相互的反感及び反對を社會的分離と解し、一方的共存の欲求を其の一方的反感よりも強き場合に於て準社會結合と解し、一方的反感をその一方的共存の欲求よりも強き時準社會的分離と解せんとするのである。斯く解することによつて以上の如き種々の事情を説明し得るものと考へるのである。

自説に對する第二の非難は愛著の事實は其の愛情を對者に向つて表現した場合にのみ認め得るもので、愛著の感情が意識に上り來らざる場合に於ては愛著が消滅したと云はねばならぬこととなり従つて社會結合が相互愛著的共存たる場合は其の社會結合は愛著の感情の生滅につれて生滅することとなり、社會の存續を無視し社會に隨時中斷を許すこととなるの不都合があるといふことである。之れ一應尤もな疑問である。併し乍ら感情の考察に一家を進むるに従つて此の疑團は立所に氷解するであらう。マク・ドゥガルが情緒を素質 disposition 又は傾向 tendency と考へたことが即ちこの質問に答へたものである。本來吾人が親に親しむと云ひ子を愛すると云ふは「親しむ」又は「愛する」といふ表現を用ひたる場合又はそを意識した場合のみ親に親しみ子を愛するといふのではない。過去より現在に至るまで引續き愛して來たし又將來も愛さると云ふ意味を含蓄する。即ち愛情は一の傾向を有して不斷に存續する素質をなすと云ふのである(註一四)。斯くして對者に愛著する素質が自己に於て成立し、何時如何なる場所に於て遭遇するも愛の表情運動が展開せらるゝのである。愛著

により結合してゐる兩者の間には此の傾向によつて不斷の結合が成立する。相互愛著的共存は愛著の素質が兩者に存する限り存続する社會を意味する。故に其の愛著的素質が消滅すると同時に社會結合も亦終了する愛著の表情運動の行はるゝ場合又は愛著することの意識せらるゝ場合のみ社會が存立して、然らざる場合は社會が中斷するのでは斷じてない。

(註一四) マクドゥガルは明らかにかう云つて居る。全く愛する人を想ひ出しもせず又愛と云ふ感情を経験して居ない時でも其の人を愛して居ると云はるゝものである。人が他人を愛し又は嫌つて居ると云ふことによつて意味せらるゝものは、其の他人を考へた時或種の感情を経験すべき傾向を有するといふことである。即ち愛情や嫌惡は愛或ひは嫌惡の對象を想起した時には何でも或る感情を経験すべき繼續的傾向であると (Mc Dougall, Social psychology, 1908, p. 123-124)。氏は又情緒は神經素質として考へることができるとも云つて居る (op. cit. p. 124)。

自說に對する非難は以上に限るものとは思はれない。社會結合は愛著による結合のみに限らず、利益的結合も亦社會結合であると言はねばならぬと云ふのも其一である。物々交換より轉じて貨幣經濟時代に入つてからは交易の範圍頗る擴大し未知の國民間に自由に取引が行はるゝに至つたのであるが、殊に信用の發達が交易を助長して以來この傾向が更に著しくなつた。故に從來の如く相互に接觸して取引を行ふの必要は最早やなくなつた。未知の得意が到處に散在するといふ奇しき現象を呈するに至つた。斯くの如き場合利益的結合は何等愛著の分子を含めぬやうに見られる。

併し乍ら私の見解によれば、かゝる場合全く愛著的傾向なしとは云はれない。假令相手を單に利益獲得の手段と考へて取引をする場合でも、相手が自己の獲利的手段として活動して呉れたといふことに對して稀薄ながらも或る親しみを感ずることがないであらうか。取引の反覆につれて親和の

傾向が漸次濃厚となり得ることは世上常に見るところである。唯明かに愛著を意識せず又これを表現することがないかも知れないが、この事は自から別箇の問題である。

斯くの如く見來る時は私は社會の本質が相互愛著的共存であるといふことを疑はぬ。而してかゝる概念の上に立つ時社會は分量的觀念であると云ふことが出来る。即ち愛著が強い程益々社會結合が緊密となるし、これに反する場合は社會結合が弛緩するのである。或人は云ふであらう。利益的社會に於て協働の關係が能く緊密なるを得るではないかと。併しこれは皮相の觀察である。相手を單に自己が利益獲得の手段と考ふる場合に當つては、社會結合の恒存的性質が滅却してしまふより外はない。或時は協働して居るかとのやうに見えても直ちに其の關係が斷たれ易い。斯かる變動恒なき關係を或程度の恒存の關係たらしめんがためには、そこに愛著と云ふ心的要素が存在せねばならない。愛著あることによつて始めて斯かる利益的社會が存續性を具有するに至るのである。斯かる見解に對して有力なる替同者を見出すことは困難でないであらう。即ち私は其の一人を社會學の創設者コムトの説に見出すことが出来るのである。ギティンクス及びエルウツドも亦此の種の見解の上に立つものと私は考へて居る(註一五)。

(註一五) コムトは同情と協働とを對立させて社會結合を説明した。而して此の同情と云ふのはコムトに依れば寧ろ利他的傾向を意味するのであつて、嚴格な心理學的意義に於ける同情、即ち他人の感情内容の自己に於ける再現又は反覆に過ぎないものではなく、却つて愛情を同視せられて居るのであるから、畢竟愛著と協働こそは社會結合を生ずるものであると云はねばならない。而もコムトはこの愛著が實に結社の根本的紐帶であつて、協働の感情はこの愛著を基礎として成立するものなることを説いたのである (Comte, Cours de Philosophie positive Tome VI, 501 leçon, p. 472, 高田教授 社會學原理一五頁)。

一二八頁、一二九頁)

ギデイングスは協働の形式が單純より複雑へと進化し擴充する根據は明らかに同類意識の擴張に存すると云ひ、類似せる人々の間に於て協働が必然的に發達するのは、協働せる各個人に同様の快感 pleasure を與ふるからであると云ひ、尙又同類意識は意識協働に先立つものであり若しそれが存するに至れば協働は必然的に隨伴するといふのである (Giddings, *Readings in description and historical sociology*, p. 355, ditto, *Inductive Sociology*, pp. 114, 115, 117)。而して同類意識はギデイングス自身の解釋によれば畢竟同情を意味するものであるが、科學的意義に於ける同情は如何なる事情あるも結社の因子たることが不可能であるから、それは結局利他的傾向たる愛著を意味するものであると解せねばならない。故に協働の範圍は愛著する人々の範圍によつて決定せらるゝし、愛著あるところに協働が隨伴するものと謂はねばならないのである。唯愛著の存する所必然的に協働を伴ふといふギデイングスの提言は少しく訂正を必要とする。家族友人知己又は師弟の如き愛著に因る結合に於ては必ずしも協働を伴ふものでないからである。

エルウッド又利他的傾向が存するに非ざれば恒存的な複雑協働は存在しないかつたし又存在して居ないことを説いて居る (Ellwood, *An Introduction to social Psychology* p. 256; ditto, *Sociology in its psychological aspects*, p. 320)。

上來述べ來つた理論を根據として私は社會の本質が相互愛著的共存であることを確めた。愛著と云ふが如き結社の心的因子の詳細なる研究は之れを他日に譲らねばならぬ。茲には單に社會の本質の探究を以て満足することとする。(完)